

「死への不安に及ぼす宗教関連意識の効果」

松田茶茶(神戸学院大学大学院)

序

心理学において死を扱い研究するとき、個人がもつ死に対する態度を捉えようとする試み、あるいはその態度を決定づける要因を探ることが大きく意味をもつ。死に対する態度や死観というものは非常に包括的、多面的な概念であり、またそのように捉えねばならないと主張する研究が多く、多次元的尺度も開発されてきている(Spilka, Stout, Minton, & Sizemore, 1997; Thorson & Powell, 1988, 1989; Wong, Reker, & Gesser, 1994)。

その死に対する態度の一つとして“死の不安”というものがあり、これは性格特性や心理的不適応、リスク行動と強く関連することから(Conte, Weiner, & Plutchik, 1982; Cox, Borger, Asmundson, & Taylor, 2000; Frazier & Foss-Goodman, 1988-89; Maltby & Day, 2000; White & Handal, 1990-91)，デス・エデュケーションや健康教育に寄与する役割をもつ重要な要因に位置していると言える。

死の不安は、死についての概念や態度と密接に関連しているため、その構造(内容)は文化的、宗教的な特性を強くもつものと考えられており(Florian & Kravets, 1983; James & Wells, 2002)，実際に宗教的属性の異なる集団を対象に死に関する特性的態度を調査すると、得られた結果には差異が認められる。

そこで、先行研究をレビューすることで、宗教関連意識が死の不安にどのような形で影響を及ぼすかを把握することを試みる。また、この試みが、宗教心理学および心理学において周辺領域とどのように結びつくかを、死の不安形成モデルをなぞりながら展望する。

レビュー

Clements(1998), Florian & Kravetz(1983), James & Wells(2002), Jeon(1997), Roshdieh(1997), Swason & Byrd(1998), Thorson & Powell(2000), Young(1992)の研究報告を概観すると、宗教的態度(信仰の内発性や敬虔度等)と死の不安は負の関連をもつことがうかがえる。つまり、自己の属する宗教への信仰が内発的であり、また宗教行動の頻度が高い者は、死の不安が低いと報告されている。

展望

上記のレビューから得られた知見が、心理学において如何なる意義をもつかを考える。Tomer & Eliason(1996)は、死の不安のレベルを決定づける要因として 7 つの変数を用いて“死の不安形成モデル”を構築している。そしてその 7 变数のうち、宗教的特性をもつ变数は最低でも 2 变数(世界に対する信念、死の有意義性、他)はあると見られる。(このように、死の不安形成プロセスの中に宗教的变数が介入しているため、死の不安は宗教的特性を強く反映し、また上記のレビューのような知見が得られるのは妥当であることが分かる。)

また、このモデル中には“コーピングプロセス”が存在しており、死の不安レベルを決定づける7変数のうちの2変数(世界に対する信念、自己に対する信念)に影響するとされている。このことから、精神的健康と強く結びつく死の不安をマネジメントする機能としての宗教にコーピング・スキルが大きく関わっており、健康にとって両者ともに非常に重要なと考えられる。

これらより、人間の健康を考える上で既に重要視されているコーピングに加え、そのコーピングが直接作用する先となる、宗教にまつわる(宗教から得られる)意識が、今後の健康研究において大きな意義をもつと言える。そしてそれは、宗教が人間の健康側面において、直接的あるいは間接的にもたらす影響(貢献)がどれほどの大きさをもつものかを明確化することにもなるであろう。